



## 佳 作

書評 桜庭一樹著 『砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない : a lollypop or a bullet』  
(角川書店, 2009) (和泉新書・文庫コーナー: 角川文庫 さ48-3)

文学部2年 成田紗絵

「好きって絶望だよね」

そう囁いた海野藻屑は13歳で愛する父親に殺された。

この物語は中学生の女の子、海野藻屑と山田なぎさが出会い戦い敗北する悲劇だ。

物語の語り部である山田なぎさは平凡な不幸の持ち主である。父をはやくに亡くし兄はひきこもり貯金を食いつぶしている。なぎさは生活を変える力、すなわちお金を「実弾」と呼び「実弾」をはやく手に入れ自立することを望んでいた。悲劇の中心となる少女、海野藻屑がなぎさのクラスに転校してきたことから物語は始まる。藻屑はなぎさとは違い非凡な不幸の持ち主である。容姿とお金に恵まれながら、父親に虐待され片足と片耳が不自由である。それでいながら父親を愛し、両親の離婚の際に父親についてなぎさの住む街へやってきた。藻屑はいつも「砂糖菓子の弾丸」を撃っていた。自分は人魚だと言い張り嘘で自分を塗り固めていた。愛する父親に愛されなかった藻屑は現実を否定することで世界と戦おうとしていた。でも『砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない』のだ。

『砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない』は冒頭でこれは悲劇であると伝えている。

「十月四日早朝、鳥取県境港市、蜷山の中腹で少女のバラバラ遺体が発見された。身元は市内に住む中学二年生、海野藻屑さん(一三)と判明した。」

この冒頭は私の心を縛る。私は藻屑が殺されるのを知っている。藻屑となぎさの交流の果ての悲劇をしっている。だから本当はページをめくりたくないのだ。藻屑が殺されるシーンにたどり着きたくなくてない。しかしこの悲劇がどのような過程をたどって終わるのが気になって読むのをやめることもできない。だからこの物語はとてもせつなく、やりきれない。

「藻屑も行けるものならばどこかに行くのかも知れない。大人になって自由になったら、だけど一三歳ではどこにも行けない。」

藻屑は子供でどこにも逃げられない。だから彼女は殺されるしかなかった。そうあきらめられたらどんなに楽だろう。しかし本当はそうではなかった。海野藻屑は逃げようとすれば逃げられたはずだ。彼女に手をさしのべようとした大人もいたのだから。

「ああ、海野。生き抜けば大人になれたのに……」

「けどなあ、海野。おまえには生き抜く気、あったのかよ……」

藻屑の担任が思わずこぼした一言である。物語の冒頭で、藻屑の運命は決定されている。それでももし何かひとつでも違ったら悲劇は起こらなかったのではないかと考えてしまう。

この物語で読者は山田なぎさになるのだ。作中で彼女だけは藻屑によりそい、彼女のことを理解する役割を得た。藻屑のことを分かっているのは藻屑が死んだ今、なぎさと読者だけである。藻屑とのたった一月の蜜月を理解してくれる人間はほかに誰もいない。大好きだった、大切だった人に自分ひとり取り残されてしまう。この作品を読んだ後はせつなく、そして孤独になる。こんなにせつなくて良質な孤独を味わえる作品などそうはない。